

仲ノ池緑地公園に見られる生物

はじめに

芦屋市環境づくり推進会議では、平成19(2007)年より平成21(2009)年にわたって芦屋市岩園町の「仲ノ池」について池の生物および周辺の仲ノ池緑地公園の植物調査を行ってきました。

仲ノ池は、もともと江戸時代に芦屋の農村地帯の灌漑用水として造られた池で、昭和30(1955)年ごろまでは3つの池がありましたが、当時甲南団地を開発するため2つの池は埋められてしまい、残ったのはいまの「仲ノ池」だけです。その後いろいろな経緯を経て現在は「仲ノ池緑地公園」として市民の憩いの場となっています。

そのため、池の生き物（魚やカメ、カエル、トンボなど）も古くからの住人が多く見られました。ところが平成5(1993)年池の大改修と、続いて起こった平成7(1995)年の阪神大震災における池の大崩壊とその修理などの影響と、1980年代後半から誰かが放した外来魚（ブラックバスやブルーギルなどの肉食魚）が従来からの池の住人を大量に捕食することなどによる影響で、ほとんど絶滅してしまいました。

震災後は、また、多くの観賞用のコイが誰かによって放され、また、これも外来種のアカミミガメが大量に放されたり

して、多くの生物種が入れ替わってしまい、池の生態系はまったく変わってしまいました。

そこで、芦屋市環境づく

り推進会議では、現段階での池の生物やまわりの自然環境を改めて確認してみようということになり、数回の自然観察会という、市民参加の調査を行ってきました。そのまとめとして、今回確認された池の生物を、過去にこの池に住んでいた生物と比較しながらまとめました。池の生物といっても、魚や水生生物だけでなく、池に飛来するカモ類などの水鳥、池周辺の野鳥、さらに池を生活の主な場とする昆虫類なども対象にまとめました。

なお、池周辺の植物については別の場所で紹介していますが、池の水辺の植物については池の水生生物の生活と深い関係がありますので、絶滅したものも含めてそのいくつかを紹介しておきましょう。

ささやかな内容ですが、今後仲ノ池の自然に関心をもって散策される市民の方々のハンドブックとなれば幸いです。



改修前の仲ノ池風景
(1980年代昭和55年～60年)



改修整備された仲ノ池風景(2001年12月)

I 水辺や水中の植物

A. 水中に茂る植物

現在、仲ノ池の水辺に茂っている植物は、次の2種類だけです。

① アシ (ヨシ) イネ科ヨシ属

「芦屋」の地名にゆかりのある植物ですが、現在芦屋ではこの仲ノ池と下流の宮川の一部にしか見られません。日本各地の池、沼や河岸に普通に見られる植物で、高さは2～3mにも達し、大きな群落を作ります。根茎は黄白色で長く、泥の中に横に広がって伸びます。仲ノ池では、北西岸に大きな群落をつくっています。茎は硬く中空で節があります。このため、「よしず」の材料に使われます。

秋に茎の先に大型の円錐形の花序（花の集まり）、それ



に多数の小穂がつきます。関西ではアシと呼ばれますが、関東ではヨシと呼ばれ、呼び方は違いますが同じ植物です。このアシの地下茎が岸近くを覆っているため、魚の稚魚などの隠れ家となり、ヨシノボリなどが生き残る役割を果たしました。

② キショウブ アヤメ科アヤメ属

仲ノ池では、アシ群落の東側にかなりの部分を占め茂っています。各地の池や湿地に茂り、太い地下茎から伸びます。冬は地上部は枯れ、春になると水中から新しい茎が芽生えます。5～6月ごろ、花茎を伸ばし、その先に鮮やかな黄色の花を咲かせます。もともとはヨーロッパ原産の植物で、明治30(1896)年ごろ渡

来し、各地の池畔や湿地に広がりました。仲ノ池に



は昭和30(1955)年代ごろに入ったようです。この植物も塊状の太い地下茎を持つため、池の小動物の棲みかや隠れ家としての役割を果たしています。

B. 絶滅した水辺・水中の植物

① マコモ イネ科マコモ属

震災で崩壊するまでは、池畔に生えていた植物で、貴重な植物のマコモがありました。古来から親しまれた有用植物で、種子はおコメのように食用に、茎や葉は「こも」（稲もみなどを入れる草を編ん

で作った袋)に、根は薬用にと余すところなく活用された植物です。



② ヒシ ヒシ科ヒシ属

ヒシも昭和30年代後半まではありました。ひし形の葉をして水面に浮かんでいる植物で、実は食用になります。



③ オオカナダモ トチカガミ科

アルゼンチン原産の帰化水草オオカナダモも多く見られ、水中小動物に隠れ家を提供していましたが、これらはすべて

池の改修の際失われました。



II 仲ノ池に生息する魚類について

仲ノ池の魚については、最初に述べたように平成5(1993)年の池の大改修の境にその構成種が大きく入れ替わってしまいました。それ以前にいたこの池の古くからの魚はそのほとんどがいなくなり、

それに替わって新しく池に侵入した外来種を主体とした魚種に入れ替わりました。市民観察会でも見られた現在の魚相についてまず述べてみましょう。

A. 現在の仲ノ池に住む魚たち

① オオグチバス (ブラックバス) スズキ目バス科

1980年代、誰かが放流したと思われるものが、一時はかなり増えていました。ところが阪神大震災で池が崩壊したときほぼ絶滅状態になりました。しかし、その後も放流したものがいたとみえ、数は少ないですが現在も生息しています。北アメリカ原産の外来種で、大正14(1925)年、箱根の芦ノ湖に移植され、長い間持ち出し禁止となっていました。近年のルアーフィッシングの流行で持ち出され、全国に広まりました。体長50cm、大きいものでは80cmにもなります。魚食性でその名のように大きな口を持ち、在来

の日本の魚を大量に食べてしまうため、各地で問題になっています。



す。特に琵琶湖では特産のコアユや有用魚が捕食され激減しているの、その対策に頭を悩ませています。仲ノ池も例外ではなく、在来からいた魚(モツゴ、タイリクバナタナゴなど)は捕食され、絶滅してしまいました。今後も大量に増えないよう放流などを監視するとともに駆除していく必要があります。

② ブルーギル スズキ目バス科

北アメリカ原産の外来魚で、昭和35(1960)年、伊豆半島の^{いっぺきこ}一碧湖に放流され、現在は全国に広がっています。体長は大きいもので20cmくらいになり、体側に7～10本の黒い色の横帯がありますが、明瞭でないことが多いです。この魚も他の魚や卵、エビなどを食べるので害魚の悪名が高い魚です。ブルーギルは「Blue gill」でえらぶた「gill」の中央の耳状の張り出しが濃い青色であることが名前の由来といわれています。食用にはなりますが、骨が硬いので、から揚げなどでしっかり熱しないと食べにくいです。仲ノ池には一番多く見られる魚で、4月ごろから10月ごろにかけて岸近くを3～

6 cm位の幼魚が多数泳いでいる姿が岸からも見られます。仲ノ池のエビ類（スジエビ、テナガエビなど）がほとんど絶滅状態に追い込まれたのも、この魚の捕食にあったためと考えられます。仲ノ池でもっとも駆除の必要な外来魚です。



③ カムルチー タイワンドジョウ目タイワンドジョウ科

アジア大陸東部原産の外来魚で大正9(1920)年ごろ日本に移入されました。よく似たタイワンドジョウとともに、通称「雷魚」と呼ばれる大型肉食魚で、体長80cm～1 m近くにまでなります。水深の浅い泥底の水草や浮き草の茂ったところを好み水中でじっとしています。貪食で、自分の体長とほぼ同じくらいのもので食べるといわれ、魚やカエル、時には鳥やネズミなども襲い捕食します。



汚濁した水にも生息可能な上、空気呼吸も出来るので酸素欠乏にも耐えられます。産卵期は5月から8月ごろで、雌雄が協同して浮巣を作り、そこに卵を産みます。卵が孵化した後も両親で子どもを守ります。冬の間は泥の中にもぐって冬眠します。肉は美味ですが、顎口虫（こわい寄生虫）がいるので生食は避けるべきです。仲ノ池では、東南の池畔に生えているヌマスギの根の当たりの水域に潜んでいることが多く、ときおり巨体を池の表面に浮かべている姿を見かけます。仲ノ池にはかなり古くから（昭和30年代）生息しているようで、地震での崩壊の際も泥の中にもぐって生き延びたようです。

④ コイ コイ目コイ科

仲ノ池で、もっともよく目に付き、生息数が多いのはコイです。大震災以前は、コイはこの池では目立つほどの存在ではありませんでしたが、震災以後、急激に増えてきました。その一因としては震災で壊れた市民の庭の池に飼われていたものがこの池に放されたということがあるようです。事実、マゴイだけではなく、緋鯉や錦鯉など観賞用のコイが多数見られることが、そのことを物語っています。震災以前はこのような観賞用の個体は見られませんでした。また、この池の環境もコイの生息に適していたようで、毎年5、6月ごろになると北西岸の草むらのところでコイの産卵が行われているのを見かけます。1尾の雌が20万個以上の卵を産むことを考えれば、仲ノ池にコイ

が多くなったのもうなづけます。マゴイに即していえば、体長は60cmどまりですが、大きいものでは1m近くに達するものもあります。体色は黒褐色、口にはひげがあります。池や湖、川などの流れの緩やかなところに棲んでいます。雑食性で、底生の小動物や貝、水草などを食べています。昔から親しまれた魚で、丈夫で飼育しやすいところから、品種改良なども繰り返され、さまざまな観賞用のコイの品種が生み出されています。マゴイは食用にもなり、鯉こくなどの料理にされます。



⑤ ヨシノボリ スズキ目ハゼ科

仲ノ池の古くからの住人で唯一生き残っていたのがこの魚です。もともとは川の流れのあるところにすむ魚で、川にいるものは孵化後の稚魚はただちに海に下り、2cm程になって再び川に遡上します。腹びれは吸盤状になり岩への吸い付きと短い泳ぎを繰り返して、滝のような急流もさかのぼることができます。仲ノ池にこの魚がどうして入ったのかはよくわかりませんが、この池とつながっている宮川から遡上したものか、あるいは誰かが放したのものか、いずれかが考えられます。この魚にはいくつかの型があり、変

異にとんでいます。阪神大震災以前にもこの池に生息していましたが、今回の観察会でも見つかりました。



ヨシノボリの吸盤化した腹びれ

体長が5～9cmほどの小魚ですので、おそらくは岸近くに茂るアシやキショウブなどの地下茎の間にもぐりこんで、外来魚の捕食を免れて現在まで生き延びたのだと考えられます。

B. かつてこの池に生息していた絶滅した魚

① ゲンゴロウブナ (ヘラブナ) コイ目コイ科

もともと琵琶湖特産の魚ですが、フナ釣りの対象として全国各地に放流された魚です。別名ヘラブナとも呼ばれ、仲ノ池にも古くから入っており、この池は阪神間でも「ヘラブナ釣りのメッカ」と呼ばれるほどたくさんいて、多くの釣り人が訪れたものでした。しかしこの魚も1993年の池の改修と、続けて起こった阪神大震災の池の崩壊（どちらも池の水

が抜けました)によって姿を消してしまいました。その後の調査によっても見つかりません。普通のフナに比べて体高が高く、体の幅が小さいのが特徴です。体長は平均30cmほどで、水面近くか、または中層を群れで泳ぎまわり、主として植物プランクトンを食べています。



② モツゴ コイ目コイ科カマツカ亜科

この魚も平成2(1990)年ごろまでは仲ノ池に多数生息しており、セル瓶(プラスチック製のもんどり型の漁具)を5分も入れておくと中が真っ黒になるほどたくさんはいていたものでした。淡灰色で、若い個体は雌雄とも体側に黒いたて縞があるきれいな魚です。小さい上向きの、いわゆる「おちょぼ口」なので、「クチボソ」の別名もあります。体長は雄が6~12cm、雌はやや小さく5~8

cm、岸に近い泥底の水域を好み、水の汚染にもかなり強い性質をもっています。仲ノ池で絶滅した原因は、ひとつは1980年代より放流されたブラックバスやブルーギルに捕食されたこと(特に稚魚)、もうひとつは2回にわたる水抜け(工事と地震)が主なことと考えられます。



③ タイリクバラタナゴ コイ科コイ目タナゴ亜科

その名のとおり大陸(朝鮮半島と中国の原産)から昭和17(1942)年に日本に移入され、現在中部地方以西の西日本各地に広がっています。仲ノ池にも昭和30(1955)年以降に入ったらしく、その後大繁殖をとげて、平成2(1990)年ごろまでは、この魚もセル瓶を入れると5分もすれば中に一杯入るほどでした。体長は8cmほどで、形はフナに似ています

が、扁平で体は薄く、また、特にオスは体高が高いのが特徴です。繁殖期にはオスは青、緑、バラ色などに彩られ美しくなります。浅い池の岸近くや流れの弱い川の下流域で、藻の多いところなどを好んで生息しています。このバラタナゴを含むタナゴ類は特異な生活型をもって



いて、メスは淡水産の二枚貝の中に卵を産み、卵から孵化した稚魚はしばらくの間ドブガイの体内で保護されながら育ちます。仲ノ池にはかつては大型のドブガイがたくさん生息していて、タイリクバラタナゴはこのドブガイの体内に産卵し増えていました。ところが平成5(1993)年に行われた池の大改修で、ドブガイの棲んでいた岸近くの泥底が掘り返され、石積み底になったためドブガイは激減しました。追い討ちをかけるように平成7(1995)年に起こった阪神大震災で池の水が抜け、しばらくの間池底が干上がっ

て放置されたため、ドブガイは絶滅してしまいました。それにブラックバスやブルーギルの捕食圧も加わってタイリクバラタナゴも絶滅しました。ただ、タイリクバラタナゴは外来種なので、日本に侵入後、日本産のニホンバラタナゴの生息域にどんどん入り込み、ニホンバラタナゴを駆逐していった事実もあります。かつて仲ノ池にニホンバラタナゴがいたという記録は残念ながら残っていませんので、入れ代わりがあったかどうかということはありません。

Ⅲ 魚類以外の水生生物

仲ノ池には魚類以外にもたくさんの水生生物が棲んでいます。その中には現在でも棲んでいるものもあれば、も

う見られなくなったものもあります。それらの水生生物についてもまとめておきましょう。

A. 現在の仲ノ池にみられる水生生物

① アカミミガメ は虫類カメ目イシガメ科

アメリカ・ミシシッピ州原産の外来種のカメです。ミシシッピアカミミガメとも呼ばれています。幼亀のときはミドリガメとしてペット屋さんなどで売られていた小さい緑色のカメですが、成長が早くすぐに大きくなり(甲長12~28cm)不気味になった飼育者が嫌って池や川に捨てたため、急速に日本中に広がりました。仲ノ池では昭和60(1985)年ごろ、誰かが入れたらしく、その頃から散見されるようになり、阪神大震災後から急速

に増え始めました。この池で水面に浮いたり、岸で甲羅干しをしているカメはすべてアカミミガメです。このカメは目の後ろのところに赤い筋があるのでこの名があります。仲ノ池にこのカメが入って



から、従来からいた日本産のイシガメやクサガメは生息域が重なるので、このカメに押されてほとんど姿が見られなくなってしまいました。ここにも外来種による圧力が見られます。このカメは体内に

② ウシガエル 両生類アカガエル科

別名食用蛙ともいわれ、成体は20cmほどにもなる大型のカエルです。原産は北アメリカ東海岸で、日本に入ってきたのは古く大正7(1918)年に移入されました。昭和30(1955)年ごろまでは、このカエルを獲って缶詰などにして欧米に輸出していましたが、田畑への農薬の散布で蛙肉が汚染されたため、輸出が止まり、獲る人がなくなったので、その後どんどん増えて広がりました。芦屋でも仲ノ池に限らず市内の田んぼに古くから生息していましたが、都市化で田がなくなるにつれ、仲ノ池にも多く見られるようになりました。初夏の頃から「ウオーン、ウオーン」と大きな声で鳴くのが聞かれます。この声が牛の鳴き声に似ているの

③ テナガエビ エビ目テナガエビ科

本州から九州の池沼や池、緩やかな流れの河川に棲む体長10cmほどのエビで、オスの第二胸脚(はさみあし)は非常に長く、体長の2倍ほどもあります。泥底



サルモネラ菌を持っているものがあるので、不用意に触ったりしないことです。成亀は性質が荒く、手などを近づけると噛まれることがありますので注意が必要です。



学研の観察図鑑④淡水の魚と生物
株式会社 学習研究社より



ウシガエルのオタマジャクシ

でこの名があります。この池に見られる大型のオタマジャクシはこのカエルのもので、卵から孵ったオタマジャクシの多くは越冬して2年目にカエル(成体)になります。水深のある岸近くの水面に生活し、貪食(大食い)で水中の魚やエビ、カニ、アメリカザリガニ、時には小鳥の雛、ネズミまでも食べます。眼の後ろにある鼓膜(カエルの仲間は露出している)が目より大きいのが特徴です。

を好み、夜行性で夜に活動し、雑食性で、赤虫(ユスリカ幼虫)、やご(トンボの幼虫)、魚の遺骸、水草などを盛んに食べます。卵は孵化までの間、親が保護します。冬期は岸よりの石の下などで越冬します。食用になる淡水産のエビです。このエビも1990年代までは仲ノ池に見られたのですが、その後絶滅したと思われていました。ところが平成21(2009)

年10月の観察会で、北東岸の岸近くの草の下で10数年ぶりに発見されました。昔のものが生き延びて復活したのか、誰

かが新たに放流したものはわかりませんが、今後増えていってくれるのを期待したいです。

④ ヒメタニシ ニナ目タニシ科

円錐形の小型の巻貝で、殻高約3cm、殻幅約2.3cm、螺層（貝が巻きあがっている段層）は6層で各層は多少ふくらみます。汚水に強く、昭和30(1955)年代には仲ノ池周辺にたくさんの田んぼがあり、そこに多く棲んでいて、仲ノ池にも多く流入していたのですが、田がなくなり、仲ノ池の改修などで姿を消してしまいました。岩園地区のヘイケボタルの餌になっていたのですが、この貝の減少と

ともにヘイケボタルも見られなくなりました。しかし、これも今回の市民観察会で再発見されました。これからまたこの貝が仲ノ池で増えて、ヘイケボタル復活につながればいいですね。



山海堂フィールド総合図鑑
川の生物より転用

B. かつて仲ノ池に棲んでいて姿を消してしまった水生生物

① クサガメ カメ目イシガメ科

甲長25cmほどで時には30cmに達するものもいます。体の割りに頭の大きいカメで、甲羅には3本の隆起したうね（盛り上がったブロック）がみられます。首に黄色の細い筋模様があるのが特徴で、また、危険が迫ると独特の悪臭を出すので、クサガメ（臭いカメの意味）の名がついています。本州から九州、朝鮮半島、中国に分布し、平地から里山周辺の池や

沼に棲みます。雑食性で、小型の水生生物や水草



などを食べます。仲ノ池にも以前はたくさんいたのですが、池の改修やアカミミガメの侵入によって棲む場所を奪われ、姿を消しました。

② イシガメ カメ目イシガメ科

日本固有種のカメで、本州、四国、九州に分布しています。甲長13~18cm、頭部は小さくて細く、甲羅の中央に1本のうねがあります。甲羅の後半部はのこぎり状の入れ込みになっており、他のカメとは区別できます。このカメも平地か

ら里山周辺の池や沼、小川などに棲みます。イシガメ



の子どもはゼニガメと呼ばれ、昔は愛玩用に飼われました。仲ノ池にも昭和60

(1985)年ごろまでは多くいましたが、これもクサガメ同様の理由で、この池では絶滅したものと思われます。ただ、最

③ アメリカザリガニ エビ目ザリガニ科

その名のようにメキシコ湾沿岸地方が原産地で、昭和5(1930)年6月にウシガエルの餌としてアメリカより移入された外来種です。外来種特有の生活力の強さで、今は本州から九州までに広がりました。芦屋の田や川にもたくさんいて、この仲ノ池にも多くいましたが、池の水を抜いた改修工事や地震後の改修、ブラックバスなどの外来魚によって捕食され、この池にはもういなくなりました。アメリカザリガニは体長が10cmほど、体色は赤褐色で第一胸脚は、大きなはさみと

近イシガメを放流する人がいるので、以前いたものとは違いますが、姿を見るようになりつつあります。



なり、力も強く、敵に出会うとはさみを広げて脅かし

ます。餌ははさみで捕まえ、口でかぶりついて食べます。雑食性で若いイネの葉を食べたり、田の畦に穴を開けたりするので農業害虫として嫌われています。日本在来種のザリガニは体長5cmほどで北海道、青森、秋田、岩手の3県のみ分布し、清流に棲みます。

④ ドブガイ イシガイ目イシガイ科

かつては、仲ノ池の北東岸の岸近くの泥底にゴロゴロするほどいましたが、2回にわたる池の水抜けで、まったくいなくなりました。殻長が10~20cm、殻高が約8cmにもなる大型の淡水産二枚貝です。殻は黒く、大きいですが、薄くもろい貝です。幼生は稚貝になるまで魚のえらやひれに寄生して生活します。

タナゴ類はこの貝に産卵して稚魚時代を過ごすので、



この貝がいないとタナゴ類は生息できません。仲ノ池のタイリクバラタナゴが絶滅したのもこの貝がいなくなったことが最大の原因です。

C. 仲ノ池に棲むトンボやヤンマの仲間

池の自然度を確かめるには、その池にどれくらいのトンボ類(ヤンマなども含む)が棲んでいるかがその目安になるといわれています。そこで仲ノ池に生息するトンボ類(1990年代にいたものも含む)の主なものをあげて見ま

しょう。なお「芦屋のトンボ」については、市内在住のトンボ研究家新村捷介(しむらしょうすけ)氏の詳細な研究があり、そこに仲ノ池のトンボについてもくわしく記載されていますのでご参照ください。

① ギンヤンマ トンボ目ヤンマ科

体長7cm内外で、全国に分布し、仲ノ池でも普通に見られます。オスの腹部2、3節は青色、メスでは黄緑色で雌雄の区別はつけやすいです。雌雄が連結し

て産卵している姿がよく見られます。仲ノ池でも一時激減しましたが、その後復活しました。初夏から夏にかけて見られます。

② オオヤマトンボ トンボ目エゾトンボ科

初夏から夏にかけて仲ノ池の周りを周遊している黒色の大型のトンボです。体長8.3cm内外、一見黒色に見えますが、捕らえてみると側面に黄色の太い筋があ

ります。この池で発生しているようで、改修後一時姿を消していましたが、復活しました。

③ ウチワヤンマ トンボ目サナエトンボ科

雌雄とも腹部の第8節がウチワ状に広がっているのがこの名があります。このウチワの基部は黄色紋がありますが、よく似た台湾ウチワヤンマはこのウチワが黒色だけなので区別できます。体長

7cmほど。かつては初夏から夏にかけて仲ノ池に多く見られたのですが、震災後姿を消しました。新しく侵入した台湾ウチワヤンマと水抜けが影響したものと思われ、現在は全く見られません。

④ タイワンウチワヤンマ トンボ目サナエトンボ科

その名のとおり南方系のトンボで、温暖化の影響下で近畿地方にも進出が見られます。仲ノ池では平成7(1995)年の震

災後から多く見られるようになり、ウチワヤンマに取って代わりました。大きさは前種とほぼ同じ。夏季に多く見られます。

⑤ シオカラトンボ トンボ目トンボ科

よく知られているトンボで、体長5～5.5cm、オスは黒っぽくなり、胸や腹部背面に白粉を生じ、その名ようになります。メスは俗称の「むぎわらとんぼ」

のように黄緑色に黒模様の帯を持った腹部となります。仲ノ池には春～夏に普通に見られるトンボです。

⑥ オオシオカラトンボ トンボ目トンボ科

シオカラトンボよりやや大型のトンボで、体長5～5.7cm。5～9月くらいまでは仲ノ池でよく見かけるトンボですが、シオカラトンボほど多くはありません。

オスはシオカラトンボより青みが濃く、メスは黄色と黒色がはっきりしています。オスは占有性が強く、他の個体や他のトンボを追い払う行動が見られます。

⑦ ショウジョウトンボ トンボ目トンボ科

鮮やかな赤色のトンボで、一度見たら

忘れないトンボです。体長は4.8cm内外